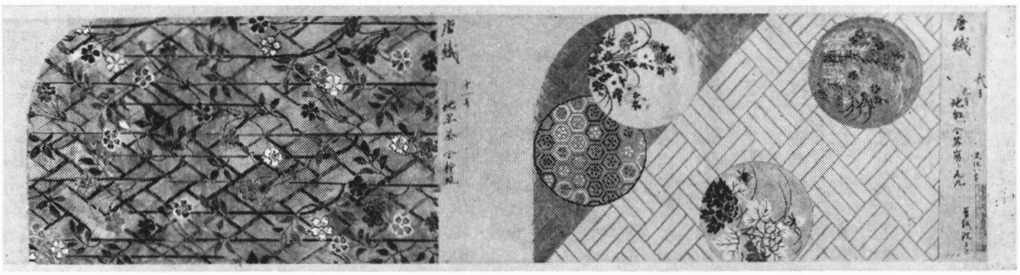

狩野芳崖模　加州家蔵能装束模様　明治20年

ツコト纔カニ四日前ニシテ畫キ了リテ未タ款ヲ署スルニ至ラサルモノナリ蓋シ翁平生ノ心事此一幅畫中ニ留存スルモノナランカ其筆墨ノ沈着淳厚其賦色ノ明麗融渾ハ近世多ク比類ヲ見ス特ニ意匠ノ高尚秀絶ニ至テハ技道ニ進ムモノニシテ遙カニ古人ヲ凌駕セントス尋常一樣墨ヲ玩ヒ筆ヲ弄シ花天月地ニ風流三味ヲ事トスルモノト時ヲ同クシテ語ルヘカラス彼ノマイケルアンジエロノ畫キタル創造（creation）ノ圖ハ羅馬ニ遊ヒタル者ノ能ク記臆スル如ク歐洲美術ノ泰斗ト稱スヘキモノニシテ氣力豪邁ニシテ布置雄大唯見ル雲間ノ上帝片手ヲ伸シテ大地ヲ指シ倏忽一個ノ壯士ヲ現出スルヲ彼ハ則チ上帝命令念力ヲ以テ人ヲ創造スルナリ是ハ則チ觀音ノ慈悲法力ヲ以テ人ヲ發育擁護スルナリ佛家發生ノ深理ハ自ツカラ基督氏造物ノ大旨ト異ナル所アリテ其美術上ノ形相モ亦隨テ同シカラス人若シ畫裏ノ心情ヲ看破シ去ラハ豈妙悟ノ天外ヨリ落ツルナカランヤ憐ムヘシ此超凡ノ絶技ヲ抱キタル人ハ天下ノ名ヲ成ス能ハスシテ空シク黄泉ノ客トナレリ嗚呼翁ノ妙想竟ニマイケルアンジエロヲシテ美ヲ擅ニセシメサリキ

前田家蔵能衣裳模写および行幸、行啓

高屋肖哲著「座談会の後に」（前出）に次のような記述がある。

〔二十年〕四月頃河瀬秀治氏方に一同の揮毫ものを持寄りて、芳崖師は其批評を試みました。此時だけで以後は持寄會はありませんでした。河瀬氏は芳崖師を評して、一師團を引連れて歩く人だと云はれました。此の暑中休みを利用して芳崖師は弟子四人を二人づゝに分けて、毎日本郷區の前田侯爵邸に到り、能衣裳の模様を寫しに暑中の間出張しました。同家では以後三ヶ年御かゝりでも寫しきれぬと申されましたが、一夏位で中止しました。

月を忘れましたが帝國大學植物園に行幸ありて御前揮毫を仰せ付けらる。又行啓の時も毎日芳崖、友信兩師御前揮毫仰せ付けられました。

この明治二十年夏の前田侯爵家蔵能衣裳の模写は、作品が狩野芳崖筆「加州家蔵能装束模様」（五巻）として本学芸術資料館に収蔵されている。それは美術学校の意匠粉本として製作されたものであった（高屋肖哲「官立東京美術学校創立記」『校友会誌』第十九号。昭和十五年十月）。

行幸云々については、狩野友信の履歴書の明治十九年十月二十九日の項に

「帝國大學植物園へ行幸ノ節御席繪被仰付天覧備候繪之内秋草花花籠壹枚御持歸相成爲賞金參圓下賜」

とあり証左が得られるが行啓については未詳である。

最後に、正確な時期は不明だが小石川の事務所を訪れたことのある人の回想記を抜粋して掲載しておく。

私が芳崖先生にお目にかかつたのは、その植物園の日本間で、美術學校入學準備のために、大體の様子を知りたいと思ひ、人のすすめるままにお訪ねしたのです。

その時の先生がどんな御様子であつたかはいま憶えてゐませんが、先生は紙帳を吊つて、その中で繪を描かれてゐました。私がお訪ねすると、「こつちへおはいり」といつて、先生は無造作に私を紙帳の中に招いて下さいました。その時描かれてゐたのが、あの有名な「悲母(ひも)觀音」でした。紙帳を吊られてゐたのは、金の砂をまいてゐられたためであつたやうに思ひます。私はただ、近く新設される美術學校の模様を、うかがつただけに過ぎませんでした。それが芳崖先生との初對面であり、また最後でした。

（『大観画談』横山大観著。昭和二十六年。大日本雄弁会講談社）

私は雅邦さんと芳崖さんが植物園にゐる頃、友信さんに勸められて行つて見たことがあつた。學校が出來るといふ噂さがそろ〳〵立つ頃で、植物園には取調所があつたのです。その時芳崖さんは例の蝙蝠のゐる松の大作を大體畫き上げたところだつたが、點苔がどうしても巧く打てぬといつて、雅邦さんに向つて、「君一つ打つてくれぬか」といふと、雅邦さんは、「イヤ打てぬ」といふ、「イヤ君の點苔は實に巧い」とまた芳崖さんがいふ、たうとう雅邦さんが木炭で「私ならこの邊に」と云つて、打つべき場所を示したら、芳崖さんは感心して平伏してゐた。

（「現代美術の黎明期を語る」中の清水南山談話。『画説』第十四号。昭和十三年二月）

註1　仏国に出品された慈母観音図というのは明治十六年の作で、絹本着色。同十七年の龍池会主催第二回パリ日本美術縦覧会に出品された。欧米美術視察の際、フェノロサが美術商ビングからこれを買い取り、同三十五年に至ってチャールズ・ラング・フリーアに譲渡した。現フリーア美術館蔵。